

田園

一月号

聖フランシスコ カトリック田園調布教会

(No.707. 2023.1.1)

カトリック田園調布教会報

☎03(3721)7271

〒145-0071 東京都大田区田園調布3-43-1

信徒の皆様、新年 明けましておめでと〜ございます

主任司祭 ドミニコ竹内正美神父

この一年を通して皆様、お一人おひとり
が主イエス・キリストの祝福で満たされま
すようにお祈り致します。

東京教区は二〇二二年六月二十五日以降
における「ステージ2対応の指針」を原則
とし、カトリック田園調布教会でもその指
針に対応して参りました。

私たちは昨年十一月二十七日待降節第一
主日（A年）から「新しいミサ典礼文」が
使用されることになりました。長年体に染
みつけたこれまでの言葉が口について出て
くるのではと案じつつ、当面は信徒も司祭
も皆、典礼文をしつかり見ながら、と言う
ことになりそうです。

この三年間、コロナウイルス感染対策のた
め教会活動が制限されました。即ち、日曜
学校、中高生会、侍者会、聖歌隊、要理勉
強会、聖書勉強会、地区集会、コーヒース
ンダーの会、等々。

カトリック田園調布教会の現状を振り返
って見ることに致します。

二〇二〇年二月頃から始まったコロナウイ
ルス感染はほぼ三年近くになりました。こ
の三年間、信徒の皆さんは小教区の感染対
策にご協力を頂き、大過なく過ごすことが
できました。皆様に深く感謝致します。

この三年間、高齢の方、基礎疾患のある
方はご自宅でお祈りくださるよう呼びか
けています。主日のミサに与かる義務は、
体調に関する事情のある方には引き続き
免除されています。教会活動の休止で信徒
の交わりが希薄になり、あの方はどうして
いるかしら？体調は如何かしら？コロナ感
染大丈夫かしら？と皆さん気遣っているの
ではないでしょうか？

私たちにとって、「人と人との交わり」が如何に大切であるか。コロナウイルス感染を通して痛感したのではないだろうか。何故なら、人の暖かさ、親切、優しさ、希望、勇気、愛の交わりが閉ざされることになるからです。信仰生活においては如何でしたか？人と人との交流が激減した中で、イエス様が仰った「わたしは世の終わりまで、いつもあなたたちと共にいる」という頼もしい神様の計らいに気付かされたのではないのでしょうか？

私自身、司牧者としての体験は、秘跡を待ち望んでいる多くの病人の自宅訪問、病院への患者訪問が「面会謝絶」で叶わなかったことです。病人自身が本当に残念がっていたのではないかと考えますと、本当に申し訳ないという心でいっぱいです。

今年こそは、コロナウイルス感染状況を見つめながら、教会活動を徐々に再開できるように準備して行こうと考えています。

信徒の皆様も無理することなく、自分の健康状態を考慮し、参加するようにして下さい。

敬老の集いミサ2022

去る九月十八日十三時より、大聖堂にて竹内正美神父様の司式で執り行われました。コロナ禍で中止になっていましたので、三年ぶりの御ミサとなりました。

台風接近であいにくの雨の中でしたが、五十二名の方が参加されました。

聖堂入口では、参加者お一人お一人にガールスカウトの方々が手作りのカードをお渡しし、日頃の感謝の気持ちを伝えました。

御ミサの中で、竹内神父様がテロテへの第二の手紙4-7の「信仰を守り抜きました」という引用をされてお話しをなさいましたが、参加者の方々のお心に響くひと時であったと思います。

これまで教会が皆様方の篤い信仰に支えられて歩んで来られたことに感謝を申し上げますと共に、今後の人生がお恵み豊かなものとなりますようにお祈りしております。

教会委員会



七五三 2022

素晴らしい晴天の下、十一月十三日九時
ミサにて七五三のお祝いが行われました。
男の子三名、女の子十二名、計十五名の子
供たちと、昨年同様に感染予防のためその
ご家族様のみが参列されました。

子供たちは少し緊張気味でしたが、桑田神
父様のお話をまっすぐな目で一生懸命聞いて
いました。



晴れ着に身を包み誇らしそつに、そして
輝くばかりの笑顔で私たちにもお恵みと喜
びをわけてくれました。
無事この節目の日を迎えられたことを神様
に感謝し、子供たちの健やかな成長を心か
らお祈りいたします。

教会委員会



堅信式

(二〇二二年十一月十三日)

十一月十三日午後二時より、菊地大司教様の司式で堅信式が行われ、二十八名の方が堅信の秘跡を受けられました。おめでとうございます。

菊地大司教様のブログもご覧ください。

堅信式ミサ@田園調布教会：司教の日記

(cocolog-nifty.com)

教会委員会



【感想文】

堅信を受けて

ガブリエルS・K

僕はおじいちゃんおばあちゃんからの生粋のキリスト教一家に生まれ、赤ちゃんの頃から神様と共に過ごしてきました。幼稚園と小学校はキリスト教系列の学校で定期的にミサやゆるしの秘跡を受けてずっと神様と密接に関わってきました。しかし、中学校はキリスト系列ではないのと部活動やコロナウイルスの影響でミサやゆるしの秘跡を受けられず神様との距離が徐々に広がっていつてしまいい年がたちました。しかし、この堅信という機会を受け、また神様との距離を近づけるチャンスをもりました。

竹内神父様からのご講義を受けて七つの秘跡の事を学び堅信の重要性を知りました。また、久しぶりにゆるしの秘跡を受けたことでこの三年間犯してきた嘘や罪について再確認し神様に罪を許してもらうことができました。

そして堅信式当日、菊地大司教様に十字架を切っていただき神様への信仰心を誓い堅信することができました。僕はこの堅信式を通して神様との距離を近づけることができました。これからも神様の信仰を忘れず神様と共に人生を歩んでいきたいと思います。

堅信の秘跡をいただいて

マリアM・W

二〇二二年十一月十三日 午後二時より、菊地大司教様の司式による堅信式のミサで堅信の秘跡を受けることが出来ましたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

思い返せば受洗前、小学校受験の折には伯母からのプレゼントの不思議のメダイを握りしめ、祈って臨みました。第三次選考は抽選でしたので尚強く祈り続けました。そして合格！その時は「マリア様が助けて下さった。」と母に言いました。心から自分の力だけではない不思議な力と、子ども心に感じたのです。

通っていた幼稚園の園長先生をされていた神父様に「洗礼を受けたのですが、母も一緒に」とお話をしましたら、神父様は喜んでくださり、すぐに準備が始まりました。小学校二年生の四月の洗礼式には、親交のあったシスターも来て下さり、信仰の道の扉が開いた日のことを昨日のようによく憶えています。あの日から、三十九年余りが経ちました。

こうして堅信式を迎えることになったのは、洗礼の代母であった伯母が今年三月に帰天したことによります。その姿は本当に信仰者として心から尊敬できる、見事な死の迎え方でした。私もいつかその日を迎えることでしよう。伯母のように、感謝に始まり感謝に終わる人生を歩めるよう、堅信の秘跡をいただきたいことで、もっと深い信仰、もっと強い希望、もっと強い熱心な愛をもち、信仰の道を歩みたいと思います。

ミサが厳かに始まり、按手と塗油を受け

て、聖霊の恵みに身が引き締まる思いがしました。これを機に、私も神様の子として成長してゆきたいと思えます。代親をお引き受けいただきましたU様には、心より感謝申し上げます。



一人だけど一人じゃない

クララ・セシリアI・K

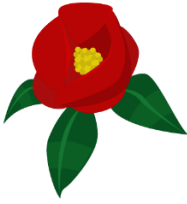
祈りとは孤独になるものだと思っていた。孤独になって神様と向き合うものだと思っていた。

堅信式にあたり勉強会があった。主なテーマは七つの秘跡について、七つの秘跡とは、見えないものが見えるということ。私は、それが祈るということに感じた。祈りは私たちの武器であると習った。祈るとはきつと信じることであろう。信じるは人それぞれ、家族を信じる、友達を信じる、物を信じる、ほかにもいろいろ。

生きていれば様々なことを信じている。むしろ信じてしからないのかもしれない。夜、目覚ましが鳴ると信じて寝る。朝時間通りに電車が来ると信じる。学校について弦が切れていないと信じて楽器のケースをそういえば開けているかもしれない。朝、昼、放課後、部活に全てを自分が勝手に捧げていることが勝手な幸福感を覚えている。

先輩や後輩のためになつていと信じているのかもしれない。同じように教会に来たら神様を信じ、聖書を信じる、信仰宣言をする。教会に来たらいろいろな人がいてそれぞれ一日をどうして信じている者はきつと違う。

けれど、常に共同体のメンバーが密接であると習った。信じる者は違つても、私たちは同じものを信じているから祈りはみんなの祈りなのだと分かつた気がする。信じたらうらぎられてしまうこともあるかもしれないけれど堅信を受けて、信じてもらえても裏切られても、自分自身を豊かにするから、とことん何でも信じたいたい物を信じようと思つた。



信じます

マリア・ベルナデッタK・S

菊地功大司教様に聖香油を塗られ、手を合わせてお辞儀をした時、初めて実感が湧いた。

「ああ、これで私は真のキリスト教信者になれたのだ」と。

私は幼児洗礼であつたため、自分の意志で信者になつたわけではない。小さい頃は、ただ両親や祖母に手を引っ張られ、神父様のお話を大人しく聞いていただけだつた。

学校でキリスト教を学ぶ機会もなく、また四年の海外生活および受験期は特に教会からも遠ざかつた生活を送つていた。そんな私が今回信仰を新たにできたのは、祖母の存在が大きかつたと思う。

小さい頃、日曜の朝にわざわざ迎えにきてまで教会に連れて行つてくれたのは祖母だつた。彼女こそが、神様の教えの数々を幼い私に教えてくれたのだ。それも、ただ口頭で伝えるのではなく行動で示してくれた。

それは、私が引っ越して別の教会地区になつた今でも変わらない。

例えば「隣人を自分のように愛しなさい」という神様の教え。大司教様のお話の中でも、教会の三つの役割の一つに「愛の奉仕をする」とあつた。人間は互いに助け合わないと生きていけないのであり、教会という共同体に属する私たち一人ひとりがその役割を全うせねばと思う。

「他人に優しくするのよ。そうすれば、きつと自分にも返つてくるのだから。」そんな祖母の言葉が思い出された。彼女はこれまで数々のボランティアに尽くしてきた人であり、私が誰よりも尊敬している人でもあるが、今回の堅信式ではそんな祖母の「ベルナデッタ」という洗礼名をいただくことができた。愛の奉仕の精神を忘れず、祖母の様に自分以上に他人に愛を注げる人になれるよう、努めていきたい。

コロナ禍によりここ数年開催できていな

かったという堅信式だが、今回このように参加させていただくことができ、感謝している。ここを新たな出発点とし、共同体の一員として愛の奉仕に生き、勇気を持って信仰の道を進んでいきたい。

田園調布教会での堅信式に想うこと

マリオフランシスコI・S

十一月十三日に行われた堅信式に長男とともに参加いたしました。その日は穏やかな天気でしたが、私はとても緊張していました。式の最中においても余裕がなく、係の方に事前に教えていただいたことが、あまりうまくできていなかったと思います。

式が終わって、何人かの方々からお祝いの言葉をかけられ、ご挨拶をすませて、ほっとして帰宅したことを覚えています。

堅信式に参加するまでの私の道のりは、式に参加された他の方とはかなり異なっているかもしれません。

私は以前から、あることが理由で、週に二日、神父様に教えをいただく日々を過ご

しておりました。その頃は洗礼を受けることさえも、自分のなかではまだはつきりと思っではいませんでした。

そうした中で、幼児洗礼を受けていた長男宛てに、堅信式の案内のご連絡をいただきました。その後、いつからかはもう分かりませんが、子供と一緒に教会での活動をしてみたいと思うようになりました。そして、その思いは次第に変わっていききました。

洗礼を受けたいという気持ちだが、不思議なことに、いつの間にか私の中で確固たるものになっていきました。とても静かに、当たり前のようには。

それからは、周囲の方々に相談して、これまで教えをいただいていた神父様にご報告とお願いを申し上げて、洗礼を受けることができました。私の洗礼名は、やはり周囲の方々にも相談しましたが、最終的には昨年帰天した妻の洗礼名と同じものになりました。

これまで、いろいろな方々にとてもお世話になりました。いまでも深く感謝してお

ります。中学生になった長男と一緒に、田園調布教会で堅信の秘跡を受けることができたことは、何よりもありがたいことでした。子供とともに教会に通う日が、いまは私の大きな喜びとなっております。



感謝とともに

マグダレナ・ソフィアH・M

この度田園調布教会にて菊地大司教様より堅信の秘跡を受けることができました。昨年六月竹内神父様に洗礼を授けていただいていた約一年半、コロナ感染拡大の中、私自身が悪性リンパ腫治療中のため、御ミサはほとんどリモートで与っておりました。このような状況で迷いましたが、友人達の勧めもあり堅信式を受けさせていただく決心をいたしました。

カトリック教育は小学校から大学まで受けており、神様の存在は身近に感じている環境に育ったと思います。ただ洗礼を受けるまでの信仰の深さまでは達しておりませんでした。

それが十四年前に末期癌で苦しむ姉が聖書を読んでいる様子からは是非とも洗礼をと思ひ、近くの教会の神父様をお願い致しました。病室まで神父様においでいただき、代母（姉の友人）と私の立ち合いで洗礼を授けていただきました。

痛みと不安と緊張の入り混じった姉が、受洗後一瞬で穏やかな笑顔を浮かべたのが印象的でした。それから約三週間で姉は天に召されました。受洗後、姉は神父様がお話くださった二つの「感謝すること」と「許すこと」を最後までつぶやいておりました。その二つの言葉は、私には姉の遺言のように思え、一生忘れないようにと心がけてまいりました。

姉から私自身の受洗まで、長い年月がかりりましたが、きっとこれは神様が私に与えてくださった準備期間だったのだろうと思います。

実現するまで家族、友人その他多くの皆様のお助けがありやっと受洗がかない、さらにこの度、堅信式を受けることができました。姉は堅信式を受けることはかないませんでした。きつと私の背中を押してくれたと思います。

一人前の信者となれました今、関わってくださいましたすべての皆様に感謝申し上げます。これからの生活が常に神様とともにありますように、祈りに満ちた毎日を送るように努めます。ご指導をよろしくお願ひいたします。



都の聖母（京都河原町教会地下聖堂）

文・写真 柳沢 洋子

「新年にあたり、皆様は今年をどのよう
に展望なさっているでしょうか。」

「今年こそ、無益な戦争を終わらせ、安寧に
暮らせませうように。」

「展望すると言えば、観光地などで良い景
色を見渡して心が開ける思いがしますが、
京都の東山ふもとに青蓮院門跡と言う天台
宗のお寺があり、その裏側の東山を三々四
十分程歩いて登るとこのお寺の飛び地のよ
うに青龍殿將軍塚と言うところがあります。
（私は友人の妹の車で行きました。バスで
も行けます。）」

「ここには清水の舞台の五倍近い広さの木
造大舞台があり、さらに展望台に上ると京
都市内全ただけでなく、南の方に大阪のビル
群まで眺めることができます。拝観料は必
要ですが！」

「桓武天皇が都を定める時、和気清麻呂に
伴われ登り、この京都を都とすることを決

め、將軍の像に甲冑を着せ埋めて、都の安
泰祈られたことから、將軍塚と言うそう
です。（都の鬼門である北東の守りとして）

さて山を下りてきて次の日は私のお楽し
みの古本市に出かけました。

そこで偶然「京のキリシタン史跡を巡る」
と言う本を見つけて購入、その晩読んでみ
てびっくりしたことに、この將軍塚に聖母
子像が埋められていたことがある、そして
次の偶然是、宿に近い教会と言うことでミ
サにかけた河原町教会の地下聖堂に、そ
の聖母子像があると知り、二度の驚きで、
早速もう一度河原町教会に行きました。

皆様ご存知のように、一五九七年長崎で
殉教した二十六人は、一八六二年日本にお
いてはキリシタン禁令の時代、教皇ピオ9
世により二十六殉教者が聖人の位にあげら
れました。その頃、フランスのレオン・
ロバン神父は、日本の殉教者の記録を読み
深く感激して祈禱会を起し、日本に福音
を説くために教皇から派遣される司教およ

び宣教師が入国できるように祈る運動を始
めました。

同神父はザビエルが聖母に奉獻した聖堂
を京都に建てたいと望んでいたことを知り、
ザビエルが日本に携えて来たと伝えられる
聖母の画像にちなんで六体のブロンズの聖
母子像を一八六四年にローマで鑄造させ、
翌年教皇ピオ9世から祝別を受け、「都の聖
母」と命名しました。

その中の一体が、「京都に一日も早く宣教
師が入れる日の来るように、市街を見おろ
す丘の一つに埋めて下さい」というロバン
神父の手紙が添えられ、すでに日本に入国
していたパリミッシヨンの宣教師のもと
に届けられ、一八七三年同会ヴィグルー神
父によって「都の聖母」像は市内を見おろ
す東山將軍塚に埋められたのですが、キリ
スト教解禁の6年後一八七九年（明治十二
年）京都に赴任したヴィリオン神父によつ
て掘り出され、一八九〇年京都で最初に献
堂された河原町教会に安置されたのだそう
です。



今、河原町教会の地下聖堂のガラスのドーム中にいらつしやいます。とても初々しい表情のマリア様と可愛い幼児キリストの聖母子像です。

京都にいらつしやる機会があれば、河原町教会（河原町通りから姉小路を東に入る、再来年になると教会の前にホテルヒルトンが完成して河原町通りからは見つけにくくなる）と將軍塚をお勧めします。

都の聖母



河原町教会